

精選と洗練の産物——「教養」追求からみた「岩波少年少女文学全集」——

佐藤 宗子

千葉大学・教育学部

A Well-Selected and Sophisticated Series: Iwanami Collection of Juvenile Literature
and the Promotion of Cultural Education in Japan

SATO Motoko

Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九六〇年から刊行が開始された「岩波少年少女文学全集」について、先行する叢書類との関係を考慮しながら、書目の選定や月報の内容を手がかりとして特徴を確認し、また歴史的な位置づけを試みた。一九五〇年刊行開始の「岩波少年文庫」収録作を母体とし、世界を「地域割り」にした創元社版や講談社版の翻訳叢書のそれぞれと一定の関係を持つことを前提とした上で、書目の選定の際には第二次大戦後の原著が数多く選ばれていること、日常的な物語では戦中戦後の状況をテーマとするものやソ連・中国の作品紹介が眼を引くこと、ノンフィクション系統の作品の占める割合が高く、中でも古代史関連の作品や、社会と関わる活動をした人物の伝記に重点が置かれていることなどを明らかにした。また、「読書指導」欄からは、内容的にはまさしく「教養」形成追求を図っているにもかかわらず形骸化した「教養」イメージが当時存したこともうかがうことができた。

キーワード：児童文学 (Children's literature) 翻訳 (translation) 少年少女 (boys and girls) 教養 (cultural education) 全集 (series)

一

第二次大戦後の児童文学における翻訳叢書と「教養」形成の関係を考える上で、岩波書店の刊行物が果たした役割はきわめて重要である。とくに、敗戦から五年後に刊行が開始された「岩波少年文庫」と、初期の同文庫収録作に多くを依拠した「岩波少年少女文学全集」の存在は、一九六〇年代半ばまでの児童文学状況全体を見渡す上でも、見逃すことは出来ない。

この両者の刊行開始の時期の間には、二つの「地域割り」主体の翻訳叢書が創元社からは「世界少年少女文学全集」として、また講談社からは「少年少女世界文学全集」として、それぞれ刊行されている。この二社の叢書については、すでに

「少年少女」の時代——戦後における「教養形成」の対象——(『千葉大学教育学部研究紀要』第五七巻、二〇〇九) および「指導される「教養」——二つの少年少女向け世界文学全集にみる「文学」の役割——」(同誌第五八巻、二〇一〇)で検討を加えてきた。

それらの成果を参考にしながら、本稿では「岩波少年少女文学全集」に焦点を当て、特に書目の選定と月報の内容を中心にしながら、どのように先行する叢書を受け継ぎ、どのように独自性を打ち出しているのか、またそれは歴史的にどのように位置づけることが出来るのか、考察していくことにしたい。はじめに「岩波少年文庫」と「岩波少年少女文学全集」(以下、「岩波」全集)と略記)の刊行状況を概括的に捉え、次に「岩波」全集の巻構成や造本、収録作品について触れ、さらに各

巻の付録である「岩波少年少女文学全集だより」(以下、「全集だより」と略記)の内容について検討していく。その後、当時の出版状況等と関わりさせて、位置づけを試みることにする。

二

「岩波少年文庫」は、一九五〇年二月に創刊された。この叢書の目的については、同叢書の巻末に掲載されている「岩波少年文庫発刊に際して」に編集・出版側の熱い思いが強くこめられていることはよく知られている。ここでは、『岩波書店五十年』(岩波書店、一九六三)の該当欄によって、まとめておこう。それによると戦前からの少年文学の叢書企画が戦後に再興され、石井桃子の参加を得て新たに書目の選定をし、創刊に至ったとの説明がある。そして、「世界児童文学の古典を正しく移植すること、現代各国の児童文学の新鮮な傑作を紹介すること、兼ねて在来の日本の翻訳児童図書の杜撰さを改め、正確で美しい日本語の定訳を作ることが、この叢書の規い」であり、また「普及を願って小型・廉価版とした」という。この社史によれば、その後、五四年六月には「かねてより、一般図書館・学校図書館から備付として堅牢な製本が希望されていたのに応じて」上製本となり、五六年五月には「第一期完成」として一〇〇点一二一冊がすでに刊行されたことが記され、さらに「第二期として70点刊行を予定」とされている。実際には六一年二月までに、一九三冊が刊行されることとなった。(なお、同書および『岩波書店七十年』(岩波書店、一九八七)の巻末の表では、冊数合計が一九二とされているが、これは六〇年の刊行点数が五点のところを四点としたための誤りと考えられる。『五十年』二八九ページにあるように、また大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』(大日本図書、一九九三)の「岩波少年文庫」の項目執筆で奥山恵が記しているように、一九三冊と考えておく。)

「岩波少年文庫」は一作品で一冊の場合が多いが、ものによっては上下、上中下と分冊化される作品や、続編が新たに収録される例もある。日本の作品も若干ないわけではないが、初期の通巻番号でいうともっとも早いものでも一五〇番の中野重治『おばあさんの村』、続く一五一番の宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』がともに五七年一月の刊行となる。やはり、基本的にはすでに引用したように、二つの主目的を持つ翻訳叢書とみなしてよいだろう。

なお、「岩波少年文庫」は刊行開始から半世紀が経った二〇〇年からは、新版となった。巻末掲載の文章も「岩波少年文庫創刊五十年——新版の発足に際して」に改められ、装幀が変化したのみならず、新訳への切り替えが積極的に行なわれている。「定訳」にもいわば賞味期限があったというわけであろう。

では、「岩波少年少女文学全集」のほうは、どうか。刊行開始は一九六〇年一月である。前述の『岩波書店五十年』によれば、「岩波少年文庫」創刊時には当時の経済事情から廉価版にしたが、「その後経済の復興に伴って、児童図書の大型化・装幀その他の向上が著しく、図書館や学校図書室のみならず、一般の家庭からもその要求が寄せられるに至った」という。その結果として、『岩波少年文庫』に集められた名作と、それ以外の世界的名作の中から厳選して三〇巻にまとめ、「挿絵・装幀・組版」の造本上と「内容における完訳主義」を二つの大きな工夫とした叢書が刊行されることになったわけである。毎月一冊の配本で、六三年四月に完結した。

この叢書は菊判で本体がクロース装、箱入りだが、箱は十冊ずつ、デザイナーの一部の色味が変えられている。箱のままにせよ、本体でにせよ、たしかに棚に並べてみたときの美しさと堅牢さは、「岩波少年文庫」とは比べものにならない。

社史記載の内容は、当時の「岩波全集」の一ページ広告や同社の雑誌『図書』の広告の文中にもほぼ同様のことが書かれているが、さらにほかの特徴を認めることができる。たとえばそれらの広告には、他の類書と重ならないような書目の選定をしたことも謳われている。また、奥付ページには、図書カード作成の参照となるような提示がされ、そこには原著の著者名、書名の原綴、刊行年が明記されている。扉ページの裏などには、著作権に関わる記載も見られる。まさに、従来往々にしてみられた翻訳書の「杜撰さ」とは一線を画した叢書であることがよくわかる。

興味深いのは対象読者の年齢である。奥付にはいずれの巻も、「小学5・6年(中学生以上)」とある。ところが、後の一ページ広告では、「小学校中級以上」に向くとの文言も見られる。その一方、各巻の文字組みを見てみると、かなりのばらつきがある。本文についていうと、全部で五種類の組み方があるのだが、もっとも字が大きくゆるい組みは二三字×一六行×二段、もっとも詰まった組みは二七字×二〇行×二段で、見た目にはずいぶん大きな違いである。本文のページ数も最短二六五ページから最長四〇〇ページと幅は大きい。しかも、それらの差異が、巻順とは

全く関係がないのである。詳しくは本稿末尾の一覧を参照されたい。

収録状況についていうと、「岩波少年文庫」既刊の作品が八割がたである。それ以外のものは、後に「岩波少年文庫」や個人全集、あるいは愛蔵版に収録された作品がほとんどで、結局この叢書への収録のみに終わったのは「トリーヤの冒険」と「ふたたび洞穴へ」の二作でしかない。どちらも、主たる翻訳作品の併載的な要素が強いものであることを考慮すると、確かに長く読み継がれる「名作」を厳選するという目的は達せられているようである。

二つの叢書について、ざっと概括を試みた。次の節では、「岩波全集」の収録作品について、より詳細に検討をしてみることしよう。

三

本稿末尾の一覧表を見ると分かるように、「岩波全集」三〇冊には、基本的に一冊あたり一作品か二作品が収録されており、全部で四五作品を数える（二八巻と二九巻の「人間の歴史」のみ、上下二冊で一作品）。全体の構成は、一定の流れに沿っている。すなわち、一〜六巻は古典やそれに準じる一般文学などの作品、七〜二〇巻は児童文学の創作、二一巻は戯曲、二二〜三〇巻は広い意味でのノンフィクション系作品、という具合である。これらについて、もう少し細かく見てみたい。

一〜六巻の古典やそれに準じる作品は、六冊で七作品ある。内訳は、古典がギリシア・ローマ一点、イギリス一点、日本二点、準古典がイギリス二点、フランス一点となる。西洋文学の基本をかたちづくる神話や伝説が入るのは、順当なところだろう。興味深いのは、日本の作品としては伝承文学である神話と民話のみが選ばれていることである。全体としては翻訳叢書である中で、読者の側のいわば「日本的」アイデンティティを明確に意識させるといった意図があったのだろうか。準古典はシェイクスピアの戯曲の子ども向け再話と、推理小説およびSFの代表的な作品である程度は重なる書目だが、性質上、ある程度は仕方ない選択だといえよう。

七〜二〇巻は児童文学の創作で、一三冊で二四作品ある。書目選択にはいくつの特徴が見られる。地域別というと、イギリス七点、アメリカ六点、ドイツ二点、北欧二点、ソ連五点、中国二点となる。同一作家の複数作品収録もまま見られるため、単純に数値を比較することは出来ないが、はっきりしているのは英米のものが

多いこと、それ以外のヨーロッパが少ないこと、その割にソ連・中国の作品が重視されていることだろう。内容面で見ると、思いのほか日常的な物語が多い。なかでは、戦中戦後の時期に照明を当てた作品が四作ある。動物物語が二作、ファンタジーが四作で、あとは日常的物語だが、冒険的要素の強い作品が比較的多い。また、原著刊行年が第二次大戦後というのが一六作品もある。とくに、動物物語一点をのぞけば北欧・ソ連・中国の作品はいずれも新しいことに目を引かれる。大まかにいうなら、いずれの地域にせよ、「現代」の日常を描いた作品を日本の読者に手渡そうという意志が強い、とみなせるだろう。

二一巻の戯曲は、明治期以来よく知られた作品と、比較的新しくその後定着していくことになる作品の組み合わせ。新しい作品はソ連のものである。

二二巻以降は、ノンフィクション系統の作品群で、九冊一二作品、うち原著が第二次大戦後に書かれたものは九作品である。全体に占める比率は、かなり大きい。内容は、伝記五点、探検二点、歴史関係四点、地理関係一点であるが、歴史が大きく古代史に偏っている点が注目される。伝記の中でも、一点は古代史と関わり深いシユリーマンが取り上げられているし、イリン&セガールの『人間の歴史』も古い時代に多くのページが割かれている。おそらくは、「人間」とはいかなる歴史をたどってきた存在か、ということ自体を、読者にも考えさせようとする意識が働いているのではないか。またその他の伝記は、概して社会的に顕著な活動をした人々が被伝者とされている。なかにはキュリー夫人のように、いわゆる偉人伝でも取り上げられがちな被伝者もいるが、収録作では祖国との関係や第一次大戦時の様子など、彼女が生きた時代と関わらせた記述も多い。

こうしてみてみると、五〇年代の二つの「地域割り」叢書との差異が明確になってくる。まず、何よりも、ノンフィクション系統の作品が多い。次に、第二次大戦以降の新しい児童文学作品が多い。そして、ソ連と中国の原著比率が高い。その一方、全体的に一般文学の比率が低い。つまりは、圧倒的に「現代」の「少年少女」向け、歴史や社会に関心を持つような内容の作品が、多く選択されているのである。そのような原著を中心に書目の選択を行なったことと関係すると思われるのが、一冊あたりの分量が実にまちまちである点である。前述のように、文字組みの体裁は五種類ある。ゆったりしている方から順にAからEまでの五タイプに当てはめてみると、A 二三字×一六行×二段が五冊、B 二六字×一八行×二段が一冊、

CⅡ二六字×一九行×二段が一冊、DⅡ二七字×一九行×二段が九冊、EⅡ二七字×二〇行×二段が四冊となる。BとDが比較的多いものの、何か明確な区分があるというよりは実には中途半端な分かれ方となっている。(なお、作品によっては写真等が相当数、掲載されている場合がある。また、章の冒頭では一段組みの場合もある。ノンフィクション系統の巻ではことにこの傾向が強い。)

おまけに、ページ数との関連もまちまちである。便宜的にいくつか段階を設けてみると、AⅡ本文末までのページが三〇〇ページ未満のものが八冊、イⅡ三三〇ページまでが一冊、ウⅡ三六〇ページまでが三冊、エⅡそれ以上が八冊となる。Eは全体としてページ数が多く、すべてエに当たり、最長は四〇〇ページ(ノートンの「小人」シリーズ二作収録の巻)。その一方で、Dは二八六ページから三七〇ページまでと、幅が大きい。またAのなかの最小ページ数は二六五ページ(シェイクスピア物語)で、他の組み方をすればあるいはもう一作併載も可能な分量である。ちなみに、定価は分量には関わらない。途中で一回値上げされているが、ページ数にも字組みにも関係ない。

なお、対象年齢と字組みが関係なさそうな証拠として、後の節で詳しく見る「全集だより」掲載の子ども読者の感想文に触れておく。たとえば『夢を掘りあてた人』は組み体裁はAに当たるが、感想文として例示されているのは中二女子と中二男子の二名の感想文である。他方、組み体裁Bの『森は生きている／青い鳥』の場合、感想文の書き手は小四女子と小三女子である。

となると、結局は次のように見るのが妥当なのではないか——全体の叢書の規模として、三〇冊という枠を設ける一方、収録作品については、個別に、一作品ずつ選定を進めた、と。もちろん、ある程度の地域区分は意識されていただろう。その結果が、ソ連や中国の作品収録につながっただろう。しかし、そうした配慮は、創元社版や講談社版の「地域割り」の発想とは、やはり異なる。たとえば、「ドイツ」という地域が全体の構成上必要として捉え、それから該当する作品を選択していったのではない。「ケストナーの『エミールと探偵たち』という作品だから、この叢書はそれを書目として必要としたのだ、ということである。

では、選ばれた作品群は、どのような情報とともに手渡されていたのか。次に、各巻の配本時ともに読者が眼にすることになった、月報——「岩波少年少女文学全集だより」に眼を向けてみることにする。

四

(一)
創元社版や講談社版にも月報は付されていた。各巻収録作品に事寄せたエッセイなどのほか、連載記事などもあったが、概して言えば、全巻を通じた(創元社版の場合は第一期、第二期、そして第二部ごとに違いがあるのは無論だが)月報の編集方針といったものはうかがえない。それに対し、「全集だより」の場合は、三〇巻の連載の割り振りとは、一貫したページ構成が明快である。

一号あたりの構成を説明してみよう。各号は八ページだて、三段組みを基本とする。なお、配本順の号数であるため、当然ながら巻数とは一致していない。号数については、末尾の表の配本回数を参照されたい。

一ページから、二・三ページの下段にかけては、収録作品と多少の関わりを持つような巻頭記事のエッセイである。

二・三ページの上・中段から四ページにかけては、「読書指導」の欄と子どもたちの感想文が通常、二本掲載される(一人の場合もあり、また最終の三〇号(第二九巻の付録)は感想文がなく、その分、「読書指導」欄が長い)。いちばん低年齢の場合が小学三年生・四年生の組み合わせだが、大体は中学の一年生か二年生が多く、『ムギと王さま』の時は、中三女子の感想文一本に、石井桃子のエッセイ「子どもによりファンタジーを」が掲載されている。また二七号では、完結も近くなってきたことと関係するのか、感想文一本の後に、相当な長さのある「読者の声」として三十二歳の女性の文章を掲載している。感想文が一本だけなのは四、七、九、二五、二七、二八、二九号、ゼロが三〇号である。

五ページからは解説記事で、連載のテーマに即しており、テーマは一〇号ごとに変えられている。すなわち、一〇号では児童文学のジャンルについて民話、冒険小説、空想的な物語、家庭小説、学校生活の物語、知識の本(ルビとしてノン・フィクション)、科学小説、絵本、子どものための戯曲、動物文学をとりあげ、一〇号では世界のさまざまな地域の児童文学について日本、北欧、アメリカ、イギリス、イタリア、チェコ、ドイツ、中国、ソヴェト(表記のまま)、フランスをとりあげ、二一号〜三〇号までは世界児童文学の「作家について」としてヒュー・ロフティング、エーリッヒ・ケストナー、サン・テグジュペリ、M・イリー、

A・A・ミルン、宮沢賢治、アストリッド・リンドグレーン、ガイドール、アーサー・ランサム、エリナー・ファージョンをとりあげている。ちなみに、何度か登場する執筆者もおり、四回登場が瀬田貞二、三回が大塚勇三、神宮輝夫、福井研介、二回が鳥越信、渡辺茂男で、一回のみの登場が一三人である。

八ページは著訳者紹介、新刊のお知らせ、それに編集部よりとか読者の声などといったものが寄り集められている。「読者の声」掲載は毎号ではないし、子どもの声の場合もあるが、概して大人、それも小学生の親と名乗る例が多い。その場合、自身も愛読者の場合もあるし、この先子どもが大きくなった時のための購読者もある。その意味では創元社版の類似欄の様子と近い。

号によって、また記事によっては、多少のはみだしが他のページに渡ったり、前のほうのページに新刊の案内が載ることなどもあるが、概していえば整然とした作りの冊子になっている。

解説記事についてさらに付言すると、一方で「岩波少年文庫」や「岩波く全集」など岩波書店の刊行物を改めて強く紹介するとともに、他方ではこの全集を若干補充するような役割も持たされているようである。

たとえばジャンルについていうと、対象年齢が少し異なるのに「絵本」がとりあげられている。この場合の執筆者は、福音館書店で絵本編集に携わる松居直である。通常は記事中に「岩波少年文庫」および「岩波く全集」収録作が登場すると星印が付されるのだが、この場合は「岩波く全集」のみならず、「福音館く全集」の「福音館の単行本」と、他社の刊行物にもマークが与えられているのである。

また地域については、この全集に収録されていないイタリアやチェコ、さらに『海底二万里』のみのフランスについても、とりあげられている。ヨーロッパへの着目の意志はあることと、全集収録に至らなかったことを惜しむ思いの折衷ということかもしれない。

そして、人物についていえば、本叢書には収録されていないもののミルンやサンテグジュペリは、やがて愛蔵版に収録される作品の作者たちであり、あるいはこの全集刊行中およびその後、個人全集が刊行された作家たちが多い。宮沢賢治は欠落しがちな日本を補うためだろう。となると、わざわざソ連の作家二人を、それもノーソフではなくて「岩波少年文庫」には一冊翻訳されているものの本叢書には収録されていないガイドールを入れているのはきわめて特徴的ということになる

う。あるいは執筆者福井研介の意向が反映されたのだろうか。

ともあれ、これらの解説記事は、もちろん少年少女読者も十分に読みうるものがあるが、それ以上に、購買者の大人たちに「児童文学」の基礎的な知識をきちんと伝達する意図があったと捉えられるのである。

(二)

では、「読書指導」の方針はどのようなものだったのか。振り返っておくなら、創元社版では、月報に子どもの感想文が掲載されたり、読書指導関連の文章が掲載されることはあるものの、一定の方針がずっと継続するというよりも、その時々状況に合わせて相当に変化していた。講談社版では、月報ではなく本体に、きちんとページを確保していた。ページ数の増減はあるものの、かなり細かく「読み方」への指導がなされていた。それに対して「全集だより」の場合は、本体ではなく月報であり、一貫して掲載されている。本体の作品はそれ自体として読み味わつてほしいという姿勢を持つ一方、「全集だより」の「読書指導」欄執筆者の中には、講談社版の読書指導執筆者たちも何人か含まれている（今村秀夫、斎藤尚吾、黒沢浩）。これを見る限りでは、二社の中間的なあり方といえるが、実際には「全集だより」は、いずれとも異なる独自性を打ち出している。一つは、いわゆる教育現場の人間以外にも同欄を執筆させていること、二つに「指導」とは言い条、技術的な「読み方」にこだわることなく、むしろ執筆者自身がどのように読むか、あるいは執筆者なりの説教的なエッセイの趣が強い例も多いことが目に付く。さらに、複数回執筆している者も四名いるものの、一回のみの執筆者が二〇名ときわめて多いのに対し、四回と突出して多い回数を執筆しているのが無着成恭であり、また彼が最終回の同欄も執筆し締めくくっていることである。

一つめの点についていうと、たとえば松居直、富田博之、吉沢和夫、大塚勇三もこの欄に執筆している。それぞれ、ファージョン作品に関連して空想的な物語を楽しむことについて、二つの戯曲に関連して劇の見方のヒントについて、日本の伝承文学に関連して語りと書かれたものについて、『黄金のパラオ』に関連して考古学や祖先の問題に関して、エッセイをまとめたものについてよいだろう。

二つめについていうと、たとえば講談社版と共通する執筆者の中にも戸惑いが見られる。今村秀夫は、二号でリンドグレーンの二作品について、また一七号で古代史関係の二作品について書くに当たり、むしろ大人向けに、「このように子どもに

読ませたい」という提案のかたちで執筆した。その一方で斎藤は八号で、ケストナーとヴォロンコーワの作品に対して各作品が教えるものは何かを語り、黒沢も二四号で『長い冬』について、団結や親子についてとりあげ、読書のしかたを述べる。講談社版とは指導の基盤がどこか異なることを示している。

他の教師たちの場合、なかには鴻巣良雄のようにノートを書くことを推奨するなど、技術的なことに触れるものもないわけではないが、概して、自身の読みを披瀝しながらの指導という感じが強い。そもそも、配本開始の一号の執筆者が今江祥智であること自体、この欄の独自性が端からうかがえるといつてよい。今江ももちろん、元教師ではあるものの、二つの少年たちの物語に対する「読書指導」として示されたのが少年時代や少年文学についてのいわばエッセイといいうるものなから、以降の執筆者たちもそれに大いに影響されたと考えられる。今江はもう一回、七号のファージョン作品についても同欄に執筆しているが、ここでは完全に、作品に対する「ぼくの思い」を書いている。

特筆すべきは、四回執筆の無着が何を書いているかであり、その中でも最終三〇号の同欄の内容であろう。

無着が執筆したのは、三、二一、二五、三〇の各号である。(本体の収録作品でいうとそれぞれ、『夢を掘りあてた人』、『地下の洞穴の冒険／ふたたび洞穴へ』、『ロビン・フッドのゆかいな冒険』、『人間の歴史・下』となる。)無着の書き方は、作品の性質にもよってか、一回ごとに異なる。『夢』は「岩波少年文庫」未収録であるため、翻訳されたての作品を生徒とともに読んだ。つまり、「三人で」読んだ様子を伝えるかたちである。『地下の』の場合は、読んで話し合おうと呼びかける。これは講談社版などでも見られた方法である。『ロビン』になると、猿飛佐助を引き合いに出し、それとは異なることを民衆との関係で語る。むしろ、解說的といおうか。そして三〇号では、この欄自体の集大成のように、通常の感想文スペースまで使って実にたつぷりと、本の読み方についてこの全集の特長と関わらせて語り、読者の好みに即して特定の巻を紹介しつつ、最終的には三〇巻全体の読破を強く勧める。

無着は、在職する学校では子どもたちは、小学校一年生からまず絵本で「本の読み方」を教わる、だから五年生にもなればこの「岩波全集」を「だれでもおもしろく読める」と言う。つまり、「読み方の訓練」はやはり必要だと言うのだが、実

際にどんな読み方をするのか自体は、詳しくは語らない。しかし、読書の面白さについて、肝要な点を述べる——ほんとうにおもしろいというのは「わかりやすい」ところと、むずかしいところがかさなっている」のだと。その「むずかしいところ」がわかって、「おもしろいということになる」のだと。それと絡めるように、この全集の特長を三点挙げる。第一に「描かれている場面が空想できたら、こんなにわかりやすい全集はない」、第二に「おもしろい」すなわち「読み始める前と、読んだあとでは、なんだか自分がちがう人間になったような気持ちにさせられる作品」であること、第三に「ダイジェストされていない」ということ。なぜなら、本来必要なむずかしい部分が切り取られてしまったのがダイジェストだということである。

正直なところ、無着の「読書指導」の文章を読んでも、果たしてこの全集を読書することの助けになるのか、はなはだ心もとない。それを補うかのように、無着は、冒険、探偵もの、戦争もの、愛情物語、空想物、伝記物、ノンフィクションというように、読者の好きなジャンルにあわせて該当する作品名を挙げ、そこから入るところで全集の読破に向かわせようとする。なぜなら、その達成により、「生涯をつうじて、物の見方や考え方や感じ方の上で、自分の生き方の主義の上で益することが多いと思う」からである。そして、次のような文章で締めくくる。

このことは岩波少年少女文学全集の内容がただ単なる「教養」などではないということ。この30巻を、とにかくそろえてもっているということは、それだけでもすばらしいことです。

無着が先に挙げていたことは、まさしく「教養形成」の考え方ではないのだろうか。それなのに、彼は、「教養」という語をよい意味では捉えていない。そのくせ、「とにかくそろえてもっている」ような形式的な「教養主義」のあり方を、「それだけでもすばらしい」と称える。矛盾しているといつてよいだろうが、単に矛盾とのみ断じるよりは、その背景を推測しておきたい。

創元社版についてかつて小論で触れた際、その広告の文言の中などで、肯定的に「教養」が捉えられていた点にも触れた。たとえば、「明日の日本を築く少年少女に豊かな教養と情操の糧を！」といった宣伝文句が使われるばかりか、京大教授・原随園の推薦の弁などでも、「これからの日本人にとって特に大切な教養である」と

思われる。」と述べられていた。すなわち、一九五三年刊行開始の創元社版の時点では、「教養」は、まさに戦後日本を今後支えていくに必要なものとして、肯定的な意味合いのものとして捉えられていたのである。それが、十年ほど経過した六三年四月の「岩波く全集」完結の時点では、もはやそれは、「単なる「教養」という弊害ある側面が目立つ言葉と化していた。その間の社会の変化や文化状況の変転については、別に考察する必要があるが、ともあれ、その間に、熱く語られていた「教養」が風化する要因があったことは否めない。経済的な余裕の増加や、高等教育の大衆化に向かう方向性、週刊誌やテレビの普及などマスメディアの発達といった直ちに思い浮かべられる事象は、おそらく無着の苦々しい口ぶりと同関係あると考えて間違いないまい。

「全集日より」は、広く大人を含めた読者に対して、世界的な広い視野から「児童文学」とは何かを啓蒙し、またそれらの選りすぐった「名作」をいかに読むか、「指導」者自身が読みを展開してみせながら、三〇巻全体で一つの総体であることを強く主張しているのである。

五

「岩波く全集」の刊行期間は、一九六〇年一月から六三年四月までの二年半である。この間、岩波書店では、「ドリトル先生物語全集」二巻を六一年九月から六二年七月にかけて、また「ケストナー少年文学全集」八巻を六二年五月から八月にかけて刊行している。つまり、ある時期には、世界の全集の刊行と同時に二つの特化した全集刊行が同時進行していた。それは、岩波書店が児童書刊行の方向性を広げていくことを意味してもいた。それを示す一つが、『図書』の臨時増刊刊行である。奥付でいうと六一年七月一日の、同誌一四二号、「特集／少女少女のために」がそれである。同誌「こぼればなし」欄によれば、実際には六月下旬に発行され、定期購読者や各地の講演会来会者には呈上されたが、そのときは「こぼればなし」欄がないかたちのものだった。ただし「ドリトル先生物語全集」刊行記念の趣旨であったため、若干の増刷をし、その分には同欄を付けた。つまり同じ号ながら二種類存在することになる。(大阪府立中央図書館国際児童文学館には、実際に、両方の特集号が所蔵されている。)

青少年向けの文学が臨時増刊まで発刊するほどに注目されるのはありがたいこ

とながら、実際にはそれは、「井伏鱒二氏の長い努力によって完成した」「ドリトル先生」シリーズの完結記念となると、やや肩透かしの感もある。長年にわたったことともあるとはいえ、結局は、文学者としての井伏の存在ゆえの計らい、ということになってくるからである。それでも、巻末の広告ページを見れば、「岩波の子どもの本」や「岩波く全集」のみならず、「少国民のために」「科学の学校」「少年美術館」シリーズが並び、岩波の児童・青少年向けの刊行物が多岐にわたっていることをよく示している。

また、この直前の『図書』六月号を見ると、広告ページの「岩波く全集」に関連させて子どもの感想文が掲載されているなど、広告の仕方にもそれなりに版元が力を入れていく様子が見える。

「岩波少年文庫」の刊行開始から十年余りを経て、廉価版からようやくさまざまな形態の全集刊行が可能となったわけだが、それはちょうど、図書の提供に新たな精選が必要になる時期にもなってきた。右記の『図書』臨時増刊号と同じ七月、岩波書店は小冊子《100冊の本——岩波文庫より》をも刊行している。前述の社史によれば、創刊以来二七〇〇点となり「一般の読書人、とくに若い人々にとつては、その全体を見渡して選択を行うことが困難となり、適当な案内を必要とするに至った」ため、一人の選者によるアンケート等を基にして一〇〇冊を選び解説を付した小冊子にまとめた、ということである。非売品のこの冊子は「非常に歓迎を受け、増刷を重ねた」ばかりか、一〇〇冊の文庫本のセットも、「反響は著しく、岩波文庫刊行時に次ぐ盛況を示した」という。版元の社史であるから、多少は割り引いて考える必要があるだろうが、六〇年代初頭において、読書する人口が若年層に大きく広がっていったことは事実であり、その際、適当な手引きが求められたことも容易に想像がつく。

こうした現象とともに、「岩波少年文庫」を母体にした「岩波く全集」の刊行は継続されていたのである。すなわち、従来ならば、識見を備えた大人の読書人が自身の選択眼をもとに、直接に適宜の書物を子ども読者に手渡す回路を基本としていたのに対し、「岩波少年文庫」発刊時に願われていたような児童書の普及が進み、広範な子どもの本を享受する大人の層(自身が読者であるかどうかは問わず)が開拓されていくと、代わりに選択してくれる存在が求められた。同時に、古典的な作品や一般の文学とは異なる、第二次大戦後の新しい作品の場合は、従来の目利きで

あったとしても、選定眼が働きにくいという事情も重なったであろう。だからこそ、類書と書目が重ならないように配慮され、また多くの新しい作品群を含みこむ全集は、「岩波」の名前を叢書に冠することによって選定眼の保証をし、全体でセットとしての「教養」の役割を担った——皮肉にも、形骸化するその語への嫌悪をあらわにしつつも実体としてはまさに「教養」形成を目指す「読書指導」の言葉とともに送り出されて。

六二年一月からの特装愛蔵本の刊行は、「10余年の経験と、日本の最近の印刷技術の急速な進歩および市場の状況」から可能と判断されたことによる。六三年七月には「岩波おはなしの本」が刊行され始め、六四年二月には「岩波の大型絵本」が「一冊一冊異なった型の個性ある絵本」を特長として刊行開始となる。特に愛蔵版や大型絵本は、まさしく市場の成熟なしには実現し得なかったことだろう。同時に、「岩波文庫」をはじめとする他の刊行物における精選された「教養」の提供があったからこそ、公共図書館や学校図書館だけでなく、一般の家庭も含めての普及は進めやすかったとも考えられる。

堅牢で落ち着きのある造本に少し背伸びしたような気分を味わいつつ、戦後のイギリスのファンタジーの世界に浸り、普段知ることの少ないソ連や中国の子どものちの日常を垣間見、古代に思いを馳せたり社会の公正をめざして活動する人々に目を見張りながら、ノンフィクションのページをめくる——それが、この叢書が思い描いた子ども読者の姿の一例といえるだろう。

そして、個人的な事例を付け加えるなら、私自身も小学生時代に、わずかながらその体験をした記憶がある。残念ながら、図書館に全巻そろっているような環境ではなかったため、ほんの数冊しか読んではない。それでもたとえばジェーン・アダムスやガンジーの伝記は、確かに社会というものの持つゆがみに眼を開かせてくれた。小学校三年時に接したシュリーマンの伝記では、神話的世界と現実の古代がつながる様によくわからないながら目を丸くした。その一方、「陶奇の夏休み日記」では、このジャンルの作品を楽しみつつも、すでに中ノ関係が悪化した後の時代の読書であったため、少し過去の時代の歴史を覗き見るような冷めた思いも抱いた。

それらを総合するなら、無着が方向付けるような実体的な「教養」形成の一端を経験したとも考えられる。ただし、自身の読書への関心等を客観的に考えるなら、体験があるからこそ逆に、この叢書が一般的な子ども読者すべてに浸透しうるとは考

えにくい。経済的な余裕があったとしても、図書館にせよ家庭にせよ、「とりあえず並べる」読書と化した例も数多くあったことは想像に難くない。

「岩波少年少女文学全集」は、第二次大戦後の一九五〇年代から続いていた、「教養」形成をめざした少年少女向け翻訳叢書の、一つの凝縮した結実ということが出来る。同時にそれは、形骸化に陥りかねない危険と裏腹なものともなっていた。この後、「岩波少年文庫」はいわば休眠期間に入り、岩波書店の翻訳書刊行のあり方にも変化が出てくること、同時期には創作児童文学で「現代児童文学」の出発期の作品が出揃い、やがて展覧期に入っていくこと、世界の「地域割り」全集についていえば小学館が六四年から「少年少女世界の名作文学」、六八年から「少年少女世界の文学 カラー版」、七一年から「少年少女世界の名作」を次々に刊行し、そのなかでいわゆる「和文和訳」を実行することなどを付言し、時代の潮流の上昇のなかに「岩波少年少女文学全集」を位置づけ、とりあえずのまとめとしたい。

※ 本稿は、平成二二年度科学研究費補助金基盤研究(C)「少年少女向け名作と「教養」形成——児童文学における翻訳叢書が果たした役割」の研究成果の一部をまとめたものである。

※ 本稿の骨子は、梅花女子大学で開催された日本児童文学学会第四九回研究大会で平成二二年一月一日(日)に発表した。

岩波少年少女文学全集

巻	配本	発行年月日	収録作品名	作者名	訳者名	原著	本文 ページ	文字組み
1	4	1961. 2. 10	ギリシア・ローマ神話	ブルフィンチ	野上弥生子	1910	9-341	26*18*2
2	25	1962. 11. 10	ロビン・フッドのゆかいな冒険	パイル	村山知義・村山亜土	1883	11-306	26*18*2
3	27	1963. 1. 10	シャーロック・ホームズの冒険	コナン・ドイル	林 克己	1891	5-286	27*19*2
4	20	1962. 6. 11	シェイクスピア物語	ラム	野上弥生子	1807	7-265	23*16*2
5	23	1962. 9. 10	海底二万里	ジュール・ヴェルヌ	石川 湧	1869	9-378	27*20*2
6	15	1962. 1. 10	日本民話選 古事記物語	木下順二 福永武彦			9-371	23*16*2
7	1	1960. 11. 10	エミールと探偵たち オタバリの少年探偵たち	ケストナー セシル・デイ・ルイス	小松太郎 瀬田貞二	1928 1948	7-309	26*18*2
8	6	1961. 4. 10	ヴィーチャと学校友だち トーリヤの冒険	ノーソフ ノーソフ	福井研介 福井研介	1958 1960	7-328	23*16*2
9	7	1961. 5. 10	ムギと王さま	ファージョン	石井桃子	1955	7-277	26*18*2
10	5	1961. 3. 10	床下の小人たち 野に出た小人たち	ノートン ノートン	林 容吉 林 容吉	1952 1955	(7)-400	26*18*2
11	2	1960. 12. 10	さすらいの孤児ラスムス 名探偵カッレくん	リンドグレーン リンドグレーン	尾崎 義 尾崎 義	1953 1956	7-357	26*18*2
12	12	1961. 10. 10	あしながおじさん 続あしながおじさん	ウェブスター ウェブスター	遠藤寿子 遠藤寿子	1912 1915	5-392	27*20*2
13	13	1961. 11. 10	あらしの前—レヴェル・ランド— あらしのあと—続レヴェル・ランド—	ドラ・ド・ヨンゲ ドラ・ド・ヨンゲ	吉野源三郎 吉野源三郎	1943 1947	7-330	26*18*2
14	18	1962. 4. 10	こぐま星座	ムサトフ	古林 尚	1949	7-309	27*19*2
15	11	1961. 9. 11	名犬ラッド 私たちの友だち	ターヒューン バイコフ	岩田欣三 上脇 進	1919 1941	7-312	27*19*2
16	9	1961. 7. 10	ツバメ号の伝書バト	アーサー・ランサム	神宮輝夫	1936	7-362	27*19*2
17	24	1962. 10. 10	長い冬	ワイルダー	鈴木哲子	1941	7-310	26*18*2
18	21	1962. 7. 10	地下の洞穴の冒険 ふたたび洞穴へ	チャーチ チャーチ	大塚勇三 大塚勇三	1950 1957	7-320	27*19*2
19	22	1962. 8. 10	宝のひょうたん 陶奇の夏休み日記	張 天翼 謝 冰心	松枝茂夫・君島久子 倉石武四郎	1957 1956	5-288	27*19*2
20	8	1961. 6. 10	ふたりのロツテ 町からきた少女	ケストナー ヴォロンコワ	高橋健二 高杉一郎	1949 1959	13-292	23*16*2
21	14	1961. 12. 11	森は生きている 青い鳥	マルシャーク メーテルリンク	湯浅芳子 若月紫蘭	1945 1909	7-279	26*18*2
22	3	1961. 1. 10	夢を掘りあてた人 —トロイアを発掘したシュリーマン—	ヴィーゼ	大塚勇三	1955	7-308	23*16*2
23	17	1962. 3. 10	埋もれた世界 大昔の狩人の洞穴	ホワイト パウマン	後藤富男 澤柳大五郎	1941 1954	9-323	27*19*2
24	10	1961. 8. 10	エヴェレストをめざして アンナプルナ登頂	ジョン・ハント モーリス・エルゾーグ	松方三郎 近藤 等	1954 1953	7-307	26*18*2
25	26	1962. 12. 10	ガンジー伝 キュリー夫人	J.イートン E.ドーリイ	高杉一郎 光吉夏弥	1950 1939	7-370	27*19*2
26	19	1962. 5. 10	エイブ・リンカーン ジェーン・アダムスの生涯	吉野源三郎 ジャッドソン	— 村岡花子	1958 1951	9-343	27*19*2
27	16	1962. 2. 10	世界をまわろう	ヒルヤー	光吉夏弥	1929	9-289	26*19*2
28	29	1963. 3. 11	人間の歴史 上	イリーン、セガール	袋 一平	1962	9-392	27*20*2
29	30	1963. 4. 30	人間の歴史 下	イリーン、セガール	袋 一平	1962	11-379	27*20*2
30	28	1963. 2. 11	黄金のパラオ	カルル・ブルックナー	北条元一	1957	11-290	26*18*2